独立ノート No.14 2025

ANNUAL DOKURITSU note

■独立レジェンド／桜井浜江　■独立キーパーソン／吉武研司が語る
■アトリエ探偵団／堀　一浩　■特集／第91回独立展バックヤード

第92回独立展地方巡回展(予定)

■大阪展
大阪市立美術館　天王寺ギャラリー
2025年11月18日(火)～24日(月)

■中部展
三重県総合文化センター第1.2ギャラリー
2025年12月3日(水)～6日(土)

■京都展
京都市京セラ美術館
2025年12月9日(火)～14日(日)

■福岡展
福岡市美術館ギャラリー
2026年2月25日(水)～3月1日(日)

予告

第93回独立展
2026年10月14日(水)
～26日(月)
国立新美術館
搬入日／10月2日・3日

独立春季新人選抜展
2026年3月25日(水)
～31日(火)
東京都美術館

詳しくは独立展ホームページまで！ ▶http://www.dokuritsuten.com

独立ノート第14号

発行日／2025年10月1日　発行者／独立美術協会

〒141-0031 東京都品川区西五反田2-13-8-507
Tel.03-3490-5881　Fax.03-6420-0026
E-mail.dokuritsu@ceres.ocn.ne.jp
URL.http://www.dokuritsuten.com

デザイン・印刷／エーワンネットワーク

―編集後記―

昨年の第91回独立展は、感染予防対策を行い、コロナ以前の全会員が参加する方法で審査を終えることが出来ました。そこで今号では、公開することのない、搬入からオープンまでの様子を「独立展・バックヤード」として特集し、ご紹介致しました。この小冊子を片手に第92回独立展を鑑賞して頂けましたら幸いです。執筆を頂いた皆様、取材にご協力頂きました皆様へ厚く御礼申し上げます。

独立美術協会小史

【誕生ー初期】(1930ー1959) 1930年11月1日、清水登之(43歳)、鈴木保徳(39歳)、川口軌外(38歳)、小島善太郎(38歳)、児島善三郎(37歳)、中山巍(37歳)、鈴木亜夫(36歳)、里見勝蔵(35歳)、高畠達四郎(35歳)、林重義(34歳)、伊藤廉(32歳)、林武(32歳)、福沢一郎(32歳)、三岸好太郎(28歳)という14名の気鋭の画家たちが独立美術協会を設立し、翌年1月には東京府美術館で「第1回独立展」を開催した。
初期段階で野口弥太郎、須田國太郎、小林和作、海老原喜之助、鳥海青児らが会員として迎えられる。
第1回展は3,058点、第2回展4,853点、第3回展では5,000点を超える搬入点数があったと記録されており、他の団体を超える「熱狂的な支持」を得ていたことが分かる。この期に独立は近代史に輝く画家集団として確固たる地位を築き、「独立展」は俳句の「季語」になった。

【中期】(1960ー1984) 現代の洋画壇でも中心的な活躍を続けている会員が、この頃に新会員となって注目を集め始めた。画壇の芥川賞といわれた安井賞展には、独立所属の画家が多く入選・受賞した。その他昭和会展、安田火災美術財団奨励賞展など多くのコンクールや芸術賞で受賞してきた。また文化庁芸術家在外研修員として選出された画家も多く、活躍が続く。

【現在】(1985ー) 独立展以外の活動では、この期も様々なコンクールで受賞したり、文化庁芸術家在外研修員に選ばれる独立所属画家の輩出が続く。また、毎年6月を中心に銀座界隈の画廊で独立展出品者の展覧会が頻繁に開催され、美術界の話題になっている。
一方独立展内部の作品には、抽象作品だけでなく具象作品にも半立体的な作品が現れたり、写実的な傾向の作品やコンピュータを利用した作品も増えて表現がより多様化して行った。
独立展は、こうした新しく生まれようとする優れた才能には時を選ばず評価してきた。また「審査することは、同時に審査されること」という自覚を持って運営し、現在にいたる。
批評家・学芸員・会員によるギャラリートークも好評を博している。

独立ノート第14号　発刊にあたり

独立展に集う画友の皆様、世界の平和もままならぬ厳しい時代ですが、元気にご活躍のことと思います。
本展は創立以来、本年で 92 年目を向かえました。会員・準会員・会友・そして出品の皆様の炎のごとき熱い情熱にささえられ、画中に多くの賛を培い、画壇の中心的存在として今日に至っています。
描くことは楽しくもあり、又、苦しいこともありますが、その両者共、我々に生きることのすばらしさを教えてくれています。
この独立ノートが道しるべとなり、独立に集う我々が強い絆で結ばれることを願っています。

事務所委員　絹谷幸二

絹谷幸二氏は、2025年8月1日に逝去されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

目次

- ❖ 独立美術協会小史 ―― 表紙裏
- ❖ 独立ノート第14号発刊にあたり ―― 1
- ❖ 独立レジェンド／桜井浜江 ―― 2
- ❖ 独立キーパーソン／吉武研司が語る ―― 4
- ❖ アトリエ探偵団／堀　一浩 ―― 6
- ❖ 特集！ 第91回独立展 バックヤード ―― 8
- ❖ 独立ホットニュース ―― 10
- ❖ 独立人ーひとりたつひとー／中原未央 ―― 12
- ❖ 第92回独立展地方巡回展 ―― 裏表紙
- ❖ 第93回独立展告知

制作：独立ノート編集室
阿部栄一　加藤啓治　木村小百合　小金井ケイコ
児玉沙矢華　権藤信隆　阪本聡　髙橋雅史
千葉光　宮地明人
協力：画像提供／金井訓志　坂田幸雄　目黒礼子　山形美術館
三鷹市美術ギャラリー　青梅市立美術館
武蔵野美術大学 芸術文化学科 教授　杉浦幸子
ポーラ美術館／松平直之(DENBAK-FANO DESIGN)
表紙：中原未央「記憶ーtomato」 162.0×162.0㎝　2022年
キャンバス・ミクストメディア　第3回枕崎国際芸術祭／大賞受賞
鹿児島県枕崎市文化資料センター南溟館収蔵

実直に生き 描き抜いた画家

桜井浜江 さくらい はまえ Hamae SAKURAI

画を始めた最初から死の瞬間まで、描いていきます。

桜井浜江（本名ハマエ）は、1908年（明治41年）山形市宮町に、父櫻井省三、母セイの五男四女の次女として生まれた。生家は周辺有数の素封家であった。1920年に山形県立山形高等女学校に入学。在学中、図画教師の松本巍七郎と出会い絵画に興味を持った。

1924年女学校を卒業し同校の補習科一年を修したが、当時のその地の習いとして、親により直ちに結婚すべく縁談が調えられていたという。絵を描きたい一心からどうしても結婚を受け入れられず、父よりどんなに怒られても拒み続けた。本人の言葉によると「とにかく雲が重く垂れ下がったような因習に我慢することができませんでした」とある。1926年、「料理、生け花の習い事」といった口実を設け18歳で上京した。本心は私立女子美術学校（現・女子美術大学）に入学を希望していたが親の承諾が得られず、壱岐坂の川端画塾・伊達跡の岡田三郎助の研究所に通った。どこまでも独学自習で、図書館で美術書を読み勉強することもあったという。

1928年、代々木の1930年協会洋画研究所に入り、里見勝藏、林武、児島善三郎らの指導を受ける。そこではじめて画家になる為の学びを得ることになり、後に独立展での同志となる人々と切磋琢磨し合う出会いがあった。1930年協会の遺産を継いだ形で独立美術協会が発足し、1931年１月に開催された第１回展に23歳で出品。見事に２点入選を果たした。精力的に発表を続け、1948年第16回独立展にて『人物』を出品、独立賞を受賞。1952年に準会員となり、1954年に会員推挙となっている。また、1947年には女流画家協会の創立会員として参加し、独立展と同じく精力傾注の作品を発表する場として大事にしていた。

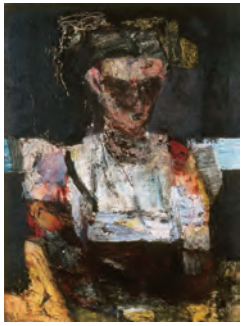
1932年に結婚するものの、画業に邁進する桜井は結婚7年目の1939年に離婚している。そんな娘の為に、父省三は三鷹に住宅を購入し、1943年には山形から材木を送りアトリエを建ててくれたという。反発して家を出た桜井だが、その後家族との絆は薄れることなく、39歳の時には亡くなった妹の子供（福島行一、久子兄妹）を引き取り親代わりとなる等、家族を大事にしていた。

「装飾的なものは嫌い」とよく話していたそうだが、1930年代初期より、リアルな対象の描写を避け、単純化し、平面化して、画面上に再構成する作風である。戦後はその見方がさらに深くなり、フォルムが強く、構成が堅固になっていく。どこまでも独自性を追求し、全身全霊を打ち込む果に成就したものとして作品が存在している。人物から始まり、壺や花、樹や崖（淵）など連作しており、1978年には70歳で200号の大作『松』を発表。その壮大なスケールと凄まじい生命感や躍動感は200号でなければならないと納得させられる。その後も大作を描き続け、2007年2月12日、東京都三鷹市の病院で亡くなった。享年98歳であった。

生前、「『本当に残る画が描きたい』と、画を始めた最初から死の瞬間まで、描いていきます。」と言葉を残していた。実直な生き様、そのままであった。

《引用・参考文献》「桜井浜江画集」藝林社 1990年発行

桜井浜江アトリエ 2018年撮影



「人物」80.3×65.2cm 1948年
油彩・カンヴァス
三鷹市美術ギャラリー収蔵

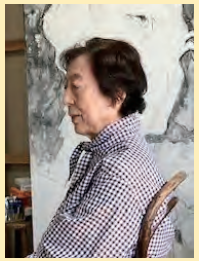
「流れ(2)」181.8×227.3cm 1989年
油彩・カンヴァス　三鷹市美術ギャラリー収蔵

「松樹」162.1×260.6cm 1979年 油彩・キャンヴァス 青梅市立美術館収蔵

「富嶽(絶筆)」194.0×259.0cm 2007年
油彩・キャンヴァス 山形美術館収蔵

浜江伯母 画家としての最後の日々

画家　福島　修子



夏も終わり9月の独立展の搬入が近づく季節になりますと、浜江が絶筆となった『富嶽』を描いていた日々を思い出します。
毎年、独立展の搬入の前後には本人も家族も緊張しておりましたが、この年はカレンダーの搬入日を大きく〇で囲み、浜江伯母は「夜通し描くからアトリエに来るな！」と特に力を入れておりました。終盤に近づいた日の朝5時頃、伯母の様子を見に行きましたら、「もう駄目だ、搬入は出来ない」と布団にうずくまっておりました。搬入日3日前のことでした。
伯母には癌による貧血があり、長い入院となりました。何事にも素朴に力一杯頑張った一生でした。

桜井浜江後期作品展

2025 年 10 月 25 日（土）～11 月 24 日（月）

桜井浜江記念市民ギャラリー

東京都三鷹市下連雀 3 丁目 42 番 3 号 1 階

開館時間：10:00-18:00 ＊展覧会によって異なる場合があります。
休館日：毎週月曜日、 12/29-1/4
（月曜日が休日の場合は開館し、その翌日および翌々日）

［お問い合わせ先］　東京都三鷹市公会堂
〒181-8555 東京都三鷹市野崎 1-1-1　Tel.0422-29-9868

桜井浜江記念市民ギャラリー

故桜井浜江会員が1939年から2007年98歳で亡くなるまで、アトリエ兼住居を構えた跡地に、桜井会員の画業を顕彰し、また三鷹市民の美術作品等の発表の場として、三鷹市桜井浜江記念市民ギャラリーが開設されました。

吉武研司が語る

よしたけ　けんじ　Kenji YOSHITAKE

1948　佐賀県佐賀市に生まれる
1969　佐賀大学教育学部特設美術科中退
　　第37回独立展初入選（以降毎年出品）
1972　東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻入学（‘76卒業）
1976　同大学院修了 ‘79同大学研究科修了
1984　第52回独立展独立賞（‘85独立賞、’86会員推挙）
1990　女子美術大学短期大学部非常勤講師（‘08教授就任）
2000　日本テレビ「美の世界」（みどりの絵日記）
2012　女子美術大学短期大学部退任（記念展）
　　ロンドンオリンピック記念展覧会、招待参加（企画：中国）
2023　北京ビエンナーレ出品
現在　独立美術協会会員 ・美術家連盟委員 ・青木繁「海の幸会」顧問

激動の青春時代

佐賀県佐賀市に生まれる。穏やかな風土に恵まれた佐賀大学に進学したがノイローゼぎみの学生時代を過ごした。親からすれば地元で暮らすことを望んでいたと思うが、その頃の東京への憧れは焦燥感となり、佐賀大学闘争に煽られて3年半で大学を中退して上京した。東京はちょうど70年安保闘争前夜のまさに激動の世界だった。学生運動が激化する中、アート・音楽・演劇など様々なジャンルで多様な文化が生まれる刺激的な時代に遭遇し、憂鬱など吹き飛んでしまうパワーを貰った。このころ独立展に初出品・初入選(21歳)ここから私の独立展が始まる。2年浪人して東京藝大に合格。大学では野見山暁治教室に籍を置いた。先生の凄さは最初よく分らなかった。文字通り、蟻が象を撫でているようなものだった。飲みに連れて行って貰い、アトリエにも伺い、懐の深い真摯な人間性に惹かれて行った。亡くなられてもなお存在感が益々大きくなっている。

作品シリーズ・テーマの変遷

その時々が制作テーマとなる。「肉屋」夫婦をイメージとする欧州風への憧れ。「行列」は初めての受賞で朝日ジャーナルの表紙に採用された。「女神」「女」は結婚した頃の心境。「肖像」「絵日記」は家族と日常の日々。「植物記」は母親の残した言葉からの追想。「黄色い人」「旅日記」はバブルの頃に米国・欧州旅行で感じた黄色人種という国際感覚。そして「八百万の神々」「太陽のように」は究極のテーマとなる。

日本には沢山の神社があるが、万物・水・山などの自然にも神が宿っていると畏敬の念を持つのは、縄文時代から日本人の霊性を感じる素晴らしいところだ。とりまく環境や根源にあるものの発見と再認識を、自分のなかに自覚するようにもなった。依頼によって壁画制作した5箇所のパブリックアートは、その一環にある。

「晴れのち雨のち晴」268×1000cm 2008年 陶板レリーフ 東京メトロ副都心線 北参道駅B1・改札前パブリックアート作品

「肖像…虫の出る日」S100 1985年

「おー日本よ」280×600cm
2010年 陶板レリーフ【注】

晴のち雨のち晴

想像してごらん　いきものたちのこと
共につながり　共に生き循環していることを

「八百万の神々…神々の誕生」F200 2009年 アクリル

「華」1996年　陶板レリーフ　学校法人 柳学園

野見山暁治(左)先生と一緒に！

独立展のこれから

これから公募展は二極化して行くと思われる。現代美術系の動向もあるが、独立は、日本の絵画として引っ張って行けるような、シビアなレベルも保って行ける公募団体であって欲しい。独立は惚れないとやって行けない！絵画の面白さを追求し、その熱により、絵は時代を映す鏡となる。僕たちの役目はある程度終わって、次の世代へバトンを引き継いで貰うのだが、このところ若い人が沢山会員になったので新しい可能性がある。上手に変換して行けたらと思う。独立美術100回展それ以降も若い世代が頑張ってくれることを期待したい。独立が好きな人達の「独立愛」を繋げて行って貰いたい。

【注】成田高速鉄道アクセス成田スカイアクセス線空港第2ビル駅プラットホーム原画　企画：公益財団法人 日本交通文化協会
製作：クレアーレ熱海ゆがわら工房　※この作品は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受けて整備されたものです。

アトリエ探偵団 atelier - TANTEIDAN

堀 一浩 ほりかずひろ Kazuhiro HORI

制作のほとんどを職場である短大の研究室で行う。８畳ほど？でしょうか。独立本展に出品する200号は学生のいない夏休みの教室の一角で贅沢にスペースを使います。自宅にもアトリエはありますが、もっぱら小品制作兼物置です。

★オーストラリアの個展で展示した完成作品

★オーストラリアの個展で展示した完成作品

略歴

1969　富山県新湊市（現射水市）生まれ
1990　独立展 初出品
1995　金沢美術工芸大学大学院修了
2004　独立展 奨励賞
2011　第４回アーティクル賞　天明屋尚賞
2017　独立展 独立賞
2018　Beautiful Bizarre Magazine Art Prize 2nd Prize
2022　個展　Dorothy Circus Gallery／ローマ
2023　個展　ギャラリー無門
2024　個展　Arch Enemy Arts／フィラデルフィア
2025　個展　Beinart Gallery／メルボルン
現在　独立美術協会会員
　　金城大学短期大学部美術学科 教授

「僕の居場所」194×162cm 1991年
油彩、キャンバス
★大学3年の作品。独立では落選。

「拘束」194×162cm 2004年
アクリル、木、キャンバス
第72回独立展／初受賞作(奨励賞)
★今とはスタイルが全く違います。

「relief」162×194cm 2017年
アクリル、キャンバス
第85回独立展／独立賞受賞作

「relief」194×162cm 2017年
アクリル、キャンバス
第85回独立展／独立賞受賞作

夏休みの制作風景

美大祭／模擬店の顔出しパネル
（堀作）

学生時代／友人たちと勝手にXmas
パレードピエロが私です。

出番を待つモチーフたち。実物や写真の資料を見ないと描けないので、ヌイグルミなどはリサイクルショップで買ったり、モノによっては自作します。

ようやくコロナ禍も落ち着き、この第91回独立展より、搬入作業や審査なども再び通常に戻りました。ここに第91回展がオープンするまでの舞台裏を紹介します。

Back yard

① 出品

1年間の制作の中での、達成感や苦しかったこと。大きな自信と一抹の不安。何故か不安を感じドキドキしている心臓と、様々な思いを乗せて、作品が運送業者によって運び出されていきます。
残った空間が広い！

② 搬入・受付

国立新美術館の搬入口の風景。出品者の思いを感じながらミスの無いように、協力してそれぞれの役割を果たしていきます。
緊張感と共に、誰よりも早く作品を見れるワクワク感に包まれています。

③ 撮影

搬入された作品はまず撮影に廻ります。搬入時のデータと紐付けながら撮影していきます。ここで初めて展覧会の概要が見えてきます。

④ 図録・校正

図録の作成に向けて、印刷の確認作業を行います。
出品された全作品をチェックします。

⑤ 審査

審査の休憩にストレッチ指導を行う木津文哉会員。
長時間緊張が続く審査。目と体をリラックスさせ、長い審査を乗り切ります。

審査の合間にホットひと息。湯澤宏会員と斎藤吾朗会員、リラックスして談笑。山本雄三会員もリラックス。

⑥ 展示

陳列担当の合図で、展示作業がスタート。会員全員で展示室ごとにチームを組んで作業に当たります。業者（東京マルイ美術）と協力して、まずは各部屋に作品の搬入から始めます。一点一点、作者の思いが詰まった大切な作品です。丁寧な作業が続きます。

業者（東京マルイ美術）が、数名のチームで、ヤグラを器用に扱いながら手際良く展示していきます。
プロの仕事です。　さあ！展覧会の始まりです！！

開館50周年記念

大津英敏展 ―家族へのまなざし―

2025年3月27日［木］―6月24日［火］
池田20世紀美術館

池田20世紀美術館の開館50周年を記念し、「大津英敏展―家族へのまなざし―」が開催されました。東京藝大学生時代の作品から安井賞受賞作品「KAORI」の他、独立展及び十果会に出品された近作約40点が一堂に展示されました。

「マリ」シリーズから「パリを背景にした少女」のシリーズに移行する契機となったのは、家族を伴っての渡仏やバルチュスとの出会いによるもの。その結果、新たな具象絵画の方向性やテーマの探究が更に深められたのです。会場に溢れる人間や自然に対する優しさと慈しみの表現は多くの来場者を魅了したことでしょう。

「秋旻」162.1×130.3cm 1973 年

「少年時代」181.8×227.3cm 2013 年

対談：土方明司×大津英敏

第91回独立展イベント紹介

誰もが気兼ねなく展示作品を楽しめる多様な鑑賞プログラムが増えてきました。国立新美術館を会場に、独立展でも次のような鑑賞会を開催していますのでご紹介いたします。

10/20 赤ちゃんと楽しむ独立展　武蔵野美術大学芸術文化学科 教授 杉浦幸子

2014年、3-12ヶ月の乳児にアート作品を鑑賞してもらう「赤ちゃんとびじゅつかん」を始めましたが、赤ちゃんが強い関心を向ける、人間の顔・目、原色、白黒の境目を、独立展の作品にも見出せると感じました。
2023、24年、9名の乳幼児が保護者やスタッフと一緒に、約１時間、作品のモチーフや色彩、テクスチャーなどを鑑賞しました。「赤ちゃんがアート鑑賞？」と思う方もいるかもしれません。が、彼らは大人よりしっかり作品を見、作品が発する情報を全身で受け取り、一人ひとり異なる反応を見せてくれます。今年も多くの赤ちゃんと独立展と繋ぎたいと思います。

「赤ちゃんと楽しむ独立展」
お申込はこちらから

10/25 目の見えない方との鑑賞会「gfit×gfit」

「gfit×gfit」は、視覚に障害のある方と晴眼者が一緒にアートを楽しみ、作品を通してそれぞれの経験や鑑賞体験などを語り合い、互いの考え方に触れる場を創出しています。東京藝術大学と東京都美術館の共同プロジェクトで生まれた任意団体です。

画像提供／ポーラ美術館　撮影：松平直之（DENBAK-FANO DESIGN）

絹谷幸二展 ―生命、夢、天地に輝いて―

大阪展 2025年4月23日［水］―5月5日［月］　京都展 2025年6月18日［水］―6月23日［月］　名古屋展 2025年7月23日［水］―7月29日［火］
東京展 2025年5月21日［水］―6月2日［月］　横浜展 2025年7月 9 日［水］―7月14日［月］　愛媛展 2025年8月 6 日［水］―8月12日［火］

「彩雲渡る宝船」194.0×259.0cm 2025年

高島屋での7年ぶりとなる個展「絹谷幸二展 ― 生命、夢、天地に輝いて ―」が、本年４月の高島屋大阪店６階美術画廊の大阪展を皮切りに、高島屋日本橋店本館美術画廊、高島屋京都店美術画廊、高島屋横浜店美術画廊、ジェイアール名古屋タカシマヤ美術画廊、いよてつ高島屋美術画廊の各高島屋美術画廊を巡回し開催されました。

「猫とその友達」
162.0×130.0cm 2025年

「湖上桜満開宝富士」
116.7×91.0cm 2025年

石の彫刻家として活躍する長男・幸太氏と、日本画家の次女・香菜子氏を交えてのギャラリートーク　2025年５月　高島屋日本橋店本館６階美術画廊にて

輝け原石！ 2025 独立春季新人選抜展

2025年3月25日［火］―31日［月］
東京都美術館

2025年独立春季新人選抜展は、準会員、第91回展入選者、賞候補者、及び選抜された会友、一般出品者221名により桜花爛漫の上野公園の東京都美術館で開催されました。
選考の結果「選抜展優秀賞」に長谷治郎、楠瀬伸和の２名「前田さなみ賞」に増田典彦、吉永朋子、津久井信幸、木暮秀樹の４名「選抜展奨励賞」に５名の方々が受賞されました。

独立人 –ひとりたつひと–　中原　未央 なかはら みお Mio NAKAHARA

2010　九州産業大学芸術学部美術学科卒業
2012　九州産業大学大学院芸術研究科修了
2013　第 48 回昭和会展／昭和会賞
2014　渡仏（パリ、他）
2016　ＦＡＣＥ2016　損保ジャパン日本興亜美術賞展／読売新聞社賞
2017　第 85 回独立展／独立賞
2018　個展〔日動画廊銀座本店 以降 23 年、福岡日動画廊 以降 21 年、24 年〕、第 86 回独立展／会員推挙
2019　第 6 回青木繁記念大賞ビエンナーレ／大賞
2021　第 3 回枕崎国際芸術賞展／大賞
2023　未来への視点シリーズ 4「中原未央展～儚さと記憶、果実のある風景～」〔大川市清力美術館〕
2023　個展　アートフェア東京 2023〔日動画廊ブース〕
現在　独立美術協会会員　日本美術家連盟会員　九州産業大学非常勤講師

表現者として

幼い頃から絵を描くことが好きで、いつも夢中になって絵ばかり描いていました。父の仕事の都合で転校を繰り返す中、絵を描くことは、自分自身を表現し、人とつながる手段でもありました。
小学生の頃、母に連れられて訪れたヨーロッパ旅行では、ルーヴル美術館、ウフィツィ美術館、ナショナル・ギャラリーといった世界を代表する美術館を巡りました。そこで出会った荘厳な絵画たちが放つ圧倒的な存在感は、今でも脳裏に鮮やかに焼き付いています。幼い私はその意味を理解していたわけではありませんが、ただただ美しさや崇高さに打たれ、心を奪われました。その体験が、画家を志すきっかけの一つだったのかもしれません。
また、祖母の家の庭にあったザクロの木にも心惹かれていました。硬い皮を割ると現れる真紅の粒たち。その不思議で奇妙な造形に、幼いながらにぞくぞくとするような神秘的な何かを感じていました。この体験もまた、今の私の根っこにある感覚のひとつです。
現在、私は「生命の死生観」や「神秘性」をテーマに作品を描いています。その根底には、あの頃感じた美しさへの畏れ、得体の知れないものに触れたときの感動が、今も静かに流れ続けているのだと思います。心の奥に残る記憶や感情を、形あるものとして描きとどめたい。その想いが、私の創作を支えています。

日常と創作の間で

日常と地続きの場所に制作があります。日々の中でふと目にする風景や出来事、何気ない瞬間から刺激を受け、イメージを膨らませていきます。果実や植物などのモチーフも実際に取材を重ね、模型を作って写真を撮るなど、日常の延長にある素材との対話から形にしていきます。
創作に行き詰まったときは、いったん手を離し、映画や本、外に出て気分をリセットします。絵に関わらない時間も思いがけず作品に影響する大切な時間です。そうして自分の内側にある感覚や記憶と静かに向き合いながら、少しずつ形にしていきます。

「実り－ざくろ」F3
2022年
ミクストメディア

「Life-2015」S100　2015年
ミクストメディア　FACE2016
損保ジャパン日本興亜美術賞展／読売新聞社賞

「間(ま)－tomato」F50
2023年ミクストメディア
笠間美術館収蔵

「Inside-T」S100　2019年
ミクストメディア　第6回青木繁
記念大賞ビエンナーレ／大賞

「Life-box C」変形20
2021年 ミクストメディア

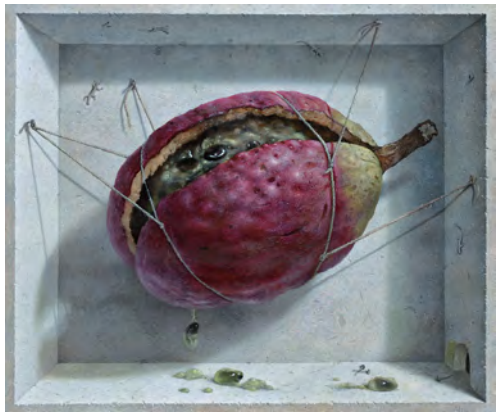
「ムベの実」S6　2023年
ミクストメディア
韮崎大村美術館収蔵

「開き扉とダリア」F10
2025年　ミクストメディア

独立展とこれから

初めて独立展に出品したときは、当たって砕けようという思いでした。憧れだった大きな公募展に挑戦すること自体が、自分にとってはどこか現実味のない、不思議な体験でもありました。
それまでは全国コンクールなどに出品して、自分の絵がどのように評価されるのかを試し、新しい表現を模索してきました。その中で独立賞をいただけたことは、これまでの制作がひとつ評価されたように感じ、とても嬉しかったです。

「記憶」F0　2023年　ミクストメディア
大川市清力美術館収蔵（F0 9点）



「How-box(M」F130　2017年　ミクストメディア
第85回独立展／独立賞

独立展は、自分の作品と改めて向き合い、真摯に発表する場だと思います。年に一度、大作が集まる場だからこそ、その空間にふさわしい作品であるべきだという緊張感を常に感じながら制作に臨んでいます。
私自身、出品するまでは不安や迷いばかりでした。ですが、思い切って挑戦したことでしか見えなかった景色や、自分なりの課題に出会えたことは、今につながる大きな糧になっています。
これから出品される方も、作品に対して悩むことがあると思います。でもそれは作家である証拠であり、決して無駄ではありません。どうか自分の表現を信じて、続けてください。
第 92 回展を迎える今年、その長い歴史の重みを感じると同時に、今という時代を映す日本美術の動向を示す場のひとつとして、独立展ならではの新たな動きや変化も期待しています。